

先進技術を駆使した 未来型農業への挑戦

建設用仮設機材メーカーの株式会社タカミヤが、
2021年夏、羽生チャレンジファームの一画で、
高性能な農業用ハウスによる実証栽培を始動した。
新規就農を志す若者や農業法人が、
高い収益を得るための持続可能な基盤づくりに挑む、
羽生愛菜プロジェクトの現場を取材した。

生産者に寄り添うため 農業へ新規参入

会社タカミヤの愛菜で農場長を務める吉田剛さんだ。以前は親用ハウスや大型栽培施設などの営業を担当していた。

「私たちは設備のプロであるとの自負はあつたものの、栽培に携わった経験がないため、農業についてもつと理解を深めたいと思考していました」と吉田さんは振り返る。「建設用の足場やビニールハウスのメーカーである私たちが農業に取り組むようになったのは、生産者の思いに寄り添った提案をしたいとの思いからでした」

経緯を話してくれたのは、株式会社農場で野菜の実証栽培をしたいとの漠然とした思いが具現化したのは、2019年秋。新規参入を推進する羽生市の大規模農場団地プロジェクト、羽生チャレンジファームの計画を知り、

高性能の農業ハウスで さまざまな技術革新を実践

野菜の実証栽培を行うにあたっての成長した。

名乗りを上げた。

自社の開発した農場用ハウスで、高収益かつ現場作業の省力化や、労務管理システムの改善デバイスを構築し、生産者の役に立ちたい。羽生愛菜プロジェクトと名付た同社の挑戦は、こうして始まったのである。



日陰となる鋼材を極力減らし、採光性が高く、作物の生育に理想的な環境を実現した天窓付きアーチ型ハウス



株式会社タカミヤの愛菜の皆さん



木山 識さん

繩田 将己さん

農場長 吉田 剛さん

り、同社が最初に選択した作物はキュウリだ。「私どもが佐賀県で施工させていただいたJA全農のプロジェクトで、キュウリ農家さんの大変な実情を知ったことも大きな理由です」と、吉田さんは明かす。

キュウリは収益性の高い作物ではあるものの、収穫までに膨大な手間暇がかかる。中腰の姿勢で行なう作業が多いため、生産者にかかる体への負担も深刻だ。さらに、生産者の高齢化や後継者不足により、国内の作付面積が減り続けているという。

2021年8月、同社の新しい試みの舞台となる3000平方メートルのハウスが完成。気温、湿度、CO₂濃度を感じ、天窓や遮光カーテンの開閉、水やりのタイミングを自動制御する未来

型農業の実証栽培が始まった。強度を保ったまま骨組みを減らし、採光性を高めた天井の高い高性能なハウスは、キュウリのツルをより上に伸ばせるため、形の良いA級品の収穫率が上がる。形の所作業台を用いての収穫風景はまるで、近未来的な野菜工場に迷い込んだようだ。

しかし、「どんなにハイテク化が進んでも、作物と真摯に向き合いうことが大切です」と、プロジェクトメンバーの繩田将己さんは話す。高品質なキュウリを量産するためには、余計な葉を取り除くタイミングや、ツルの上げ下げなどを適格な時期に行なうことが欠かせないからだ。

そして、この実証栽培で最も重要なのが、栽培過程で得た膨大なデータを構築し、品質や生産量向

上を図るためのマニュアルづくりだ。生産者の負担を減らし、高収益を上げると共に、新規就農者も短期間で利益を上げられるノウハウの構築こそが、羽生愛菜プロジェクトの掲げる重要なミッションなのである。

農業における新しいビジネスモデルの確立へ

今年4月、2棟目となる6000平方メートルのハウスが完成し、栽培面積の拡大を続けている同社。20代の若手を中心とする6人の社員とパートスタッフでキユウリやミニトマト、イチゴを栽培している。収穫した野菜は「タカミヤの愛菜」というブランド名で出荷。その品質と安定した出荷量が評判となり、取引先も順調に増えている。

一方、繁忙期の農家は休みが取り組みも、同社では実践。社員の勤務シフトは週休2日制を導入した。「新規就農者もきちんと休みを取りながら大型施設の運営ができるというビジネスモデルを確立し、農業の未来を変える夢ができた」。

一方、繁忙期の農家は休みが取り組みも、同社では実践。社員の勤務シフトは週休2日制を導入した。「新規就農者もきちんと休みを取りながら大型施設の運営ができるというビジネスモデルを確立し、農業の未来を変える夢ができた」と吉田さんはほほ笑む。

農業の深刻な人手不足と、生産者の負担を減らすために動き始めた同社の羽生愛菜プロジェクト。これからどのような進化を続けるのか、大いに期待したい。



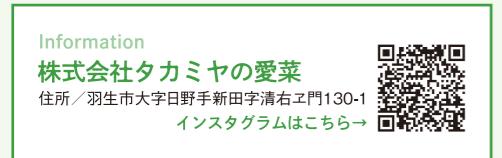
同社が栽培しているみずみずしい野菜。スーパーではじめ、地元の小売店で販売している



土の代わりにヤシガラで作られた繊維を用いた養液栽培を導入。土壤に関する病害発生リスクもなく、収穫後は肥料としてリサイクルも可能だ



ハウス内の環境計測を行い、データを蓄積・分析して見える化。得られたデータを活用し、マニュアル化することで、長年の知見や勘に頼らなくとも可能な農業を目指している



Information
株式会社タカミヤの愛菜
住所／羽生市大字日野手新田字清右二門130-1
インスタグラムはこちら→

お手伝いをしたいのです」と吉田さんはほほ笑む。

農業の深刻な人手不足と、生産者の負担を減らすために動き始めた同社の羽生愛菜プロジェクト。これからどのような進化を続けるのか、大いに期待したい。